学位論文　要旨

対話的自己論に基づく保育者の自己形成に関する
オートエスノグラフィー研究

広島大学大学院教育学研究科

教育人間科学専攻

D140035　濱名　潔

【論文構成】

序章．問題の所在と研究の目的
　第 1 節．問題
　　第 1 項．「保育者になる」という自己形成
　　第 2 項．「保育者になる」で想定されているドミナントな保育者
　第 2 節．先行研究の検討
　　第 1 項．保育者の熟達化
　　第 2 項．保育者のキャリア形成
　　第 3 項．保育者のアイデンティティ形成
　　第 4 項．保育者の自己形成
　第 3 節．本研究の目的と意義
　第 4 節．倫理的配慮

第 1 章．　自己形成をめぐる概念と研究の視点
　第 1 節．自己形成をめぐる多様な考え方
　　第 1 項．自己形成をめぐる概念の多様性
　　第 2 項．自己形成とアイデンティティ形成の違い
　　第 3 項．本研究における自己形成の定義
　第 2 節．自己形成を促える視点
　　第 1 項．外的環境との相互作用（行為や経験）
　　第 2 項．他者（人・モノ）
　　第 3 項．時間

第 2 章．本研究の理論的枠組み
　第 1 節．対話的自己論の概要
　　第 1 項．対話的自己論とは
　　第 2 項．Ｉポジション
　　第 3 項．Self
　第 2 節．対話的自己論に依拠する理由
　　第 1 項．外的環境との相互作用や他者との関係による検討可能性
　　第 2 項．自己の様々な側面を包括した検討可能性

第 3 章．対象と研究の方法
　第 1 節．筆者を対象に研究をする理由
　　第 1 項．対象を 1 人にする理由
　　第 2 項．筆者を対象にする理由

第 2 節．筆者のプロフィール
第 1 項．生い立ちと家庭背景
第 2 項．大学～大学院時代
第 3 項．新人保育者時代
第 3 節．研究方法論としてのオートエスノグラフィー
第 1 項．オートエスノグラフィーの概要
第 2 項．オートエスノグラフィーの強み
第 3 項．オートエスノグラフィーの課題
第 4 項．オートエスノグラフィーを採用する理由
第 4 節．データ収集の方法
第 1 項．回顧的記録
第 2 項．研究協力者による筆者へのインタビュー
第 3 項．新人保育者時代の日記
第 5 節．分析の方法
第 1 項．複線径路等至性モデリングによる分析
第 2 項．対話的自己論による分析

第 4 章．保育職を目指し就職するまでの経験：保育業界で園長として働くことを見据えた自己形成
第 1 節．目的と分析手続き
第 1 項．目的
第 2 項．分析手続き
第 2 節．家業の幼稚園を継ぐことを決めてから保育職に就職するまでの自己形成のプロセス
第 1 項．1 期：弟と私の将来を見据えた職業の模索と決定期（幼少時代～大学時代）
第 2 項．2 期：家業の幼稚園を継ぐ制約がもたらす大学院生活での葛藤期（大学院時代）
第 3 節．家業に関係するＩポジションを中心になされる自己内対話
第 1 項．1 期：家業の幼稚園を継ぐに至った自己内対話
第 2 項．2 期：「家業を意識する私」を中心とした進路の決定
第 4 節．小括
第 1 項．結果の概要
第 2 項．理想とする保育者像や保育者としての使命感を持たない自己形成
第 3 項．進路を決断するさいの重点と環境の関係
第 4 項．本章の課題

第 5 章．保育職という新たな環境への移行経験：大学院の経験に対する意識が希薄化していく自己形成
第 1 節．目的と分析手続き
第 1 項．目的
第 2 項．分析手続き
第 2 節．大学院の経験に対する意味づけに関する自己形成
第 1 項．1 期：自身の経歴が気になる期（201X 年 3 月末～4 月初旬）
第 2 項．2 期：大学院時代の経験や考えに縋っている期（201X 年 4 月中旬～8 月中旬）
第 3 項．3 期：拠り所としての研究と実践の分断期（201X 年 8 月下旬～12 月末）
第 4 項．4 期：担任としての責任と重圧期（201X+1 年 1 月～3 月末）
第 3 節．大学院に関係する I ポジションを中心になされる自己内対話
第 1 項．1 期：大学院の経歴に対する自信の無さから生じる普通の新人保育者ではないという気負い
第 2 項．2 期：実践的感覚と研究的思考の対立から生じる自分の感覚の信じきれなさ
第 3 項．3 期：大学院の経験に縋っても自分の保育は良くならないという求心力から派生する様々な葛藤
第 4 項．4 期：子どもの育ちに対する責任から生じる余裕の無さ
第 4 節．小括
第 1 項．結果の概要
第 2 項．大学院の経験に対する意識が希薄化するプロセス
第 3 項．自己内の異なる 2 つの背景が生み出す新たな価値観
第 4 項．本章の課題

第 6 章．子どもに対する理解とかかわりから保育者の専門性を発達させる経験：子どもと先輩保育者との関係からなされる自己形成
第 1 節．目的と分析手続き
第 1 項．目的
第 2 項．分析手続き
第 2 節．A 組における子どもと同僚保育者との関係からなされる自己形成
第 1 項．1 期：発達段階がわからず戸惑い期（201X 年 3 月 23 日～3 月末）
第 2 項．2 期：アドバイスどおりにできない焦り期（201X 年 4 月上旬～4 月末）
第 3 項．3 期：自身のかかわりで子どもが動くことが手ごたえ期（201X 年 4 月末～9 月中旬）
第 4 項．4 期：子どもとのかかわり方に対する考えの転換期（201X 年 9 月末～11 月上旬）

第 5 項．5 期：様々な視点から子どもとのかかわりを考え始める期（201X 年 11 月上旬
～201X+1 年 3 月末）
第 3 節．子どもに対する理解とかかわりの関係を示す自己内対話
第 1 項．1 期：保育がうまく進められないことから派生する複数の葛藤
第 2 項．2 期：複数のＩポジションがもたらす焦り
第 3 項．3 期：複数のＩポジションによる子どもへのかかわりの試行錯誤
第 4 項．4 期：異なる観点の自己内対話がもたらす子どもへのかかわりの試行錯誤
第 5 項．5 期：子どもの育ちに関係するＩポジションがもたらす葛藤
第 4 節．小括
第 1 項．結果の概要
第 2 項．子どもと先輩保育者の三者関係からなされる自己形成
第 3 項．「できない」ことの自覚による保育者の変化・成長
第 4 項．対話的自己論の視点からみた新人保育者の子どもに対する理解やかかわりの構造
第 5 項．本章の課題

終章．総合考察
第 1 節．各章のまとめ
第 2 節．本研究の成果
第 1 項．ドミナントとは異なる立場の保育者の自己形成
第 2 項．対話的自己論から見た保育者の変化・成長に対する捉え方の提示
第 3 項．過去の経験の意味づけとその変容が保育者の変化・成長に与える影響
第 4 項．保育者の変化・成長に関する「ローカルな知」の提示
第 3 節．本研究の限界と課題

引用文献・URL

謝辞

【論文概要】

序章．問題の所在と研究の目的

保育者の価値観は，保育を振り返る経験だけでなく，他者との出会い等の経験を積み重ねていくことで形成される（e.g.,竹石，2011）と考えられている。このように「経験のなかで自分自身を作り上げていく過程」は自己形成と呼ばれ（中間，2021），変化・成長を扱うゆるやかな「成長志向的（development-oriented)」な概念である（溝上，2008)。本研究では自己形成を「これまでにつくりあげてきた自分なりの価値観と日常場面における他者を含む外的環境とのかかわり（行為や経験）によって新たに生じる価値観を合わせること」という意味で用いる。保育者の自己形成は「保育者になる」ことと置き換えられる。「保育者になる」者の多くは子どもが好きで保育者に憧れ，高校卒業までに保育職に就くことを決め，短期大学や4年制大学といった保育者養成校で保育士資格を取得しているというドミナントな保育者が想定されていた。しかし，人の発達は青年期，成人期，老年期と後ろになればなるほど，年齢的要因や世代文化的要因ではなく個人的要因に強く規定される（Baltes，et al.，1980)。そのため，ドミナントな保育者の自己形成を捉えるだけでは，現代の多様な背景を持つ保育者の実態を描き切れないと考えた。そこでドミナントとは異なる立場の保育者の背景が描かれない原因を保育者の変化・成長と関連する熟達化（e.g.,高濱，2010)，キャリア形成（e.g.， 田頭ら，2011)，アイデンティティ形成（e.g.,足立ら，2010）の先行研究から検討した。その結果，成長のゴール設定が明確で生涯を通した一貫性と安定性が強調されており，個々の保育者の背景は捨象される傾向にあった。一方で，保育者の自己形成に関する先行研究（香曽我部，2013；香曽我部，2015）では，保育者の変化・成長が各自の背景に影響される個性的なものと捉えていることがわかった。近年，ドミナントとは異なる立場の保育者に着目した研究（e.g.,濱名，2021）が見られるものの，それらは彼（女）らの実態を描出するに留まり，従来の保育者の変化・成長の見地と照らし合わせた議論をしてこなかった。そこで本研究はドミナントとは異なる立場の保育者である筆者の自己形成を明らかにし，その知見を基に，従来の研究における右肩上がりで一様な保育者の変化・成長に対する捉え方について検討することにした。そのさい，保育職を目指し就職するまでの経験，保育職という新たな環境への移行経験，子どもに対する理解とかかわりから保育者の専門性を発達させる経験に着目した。

第1章．　自己形成をめぐる概念と研究の視点

自己形成の定義は，個人の視点から捉えているものと他者や環境の視点から捉えているものに分けられ，教育哲学の領域では人間形成と同義に，心理学ではアイデンティティ形成と同義に使用されていることがわかった。先行研究の論考を包括すると，自己形成は他者や環境とのかかわりを通して個人の自己が変化・成長していくことだと整理された。自己形成とアイデンティティ形成は類似した概念であるが，「自己の成長/発達/変化観」，「自己を扱う領域・テーマの範囲」，「自己の何を見るか」という3つの観点で異なることがわかった。以上の整理をもとに，本研究は自己形成を「これまでにつくりあげてきた自分なりの価値観と日常場面における他者を含む外的環境とのかかわり（行為や経験）によって新たに生じる価値観を統合すること」と定義した。また先行研究（e.g.,山田，2003；中村・岩川，2010；木村，1982）から自己形成を捉える視点を検討したところ，「外的環境との相互作

用（行為や経験)」,「他者（人・モノ)」,「時間」が示された。

第 2 章．本研究の理論的枠組み

本研究の理論的枠組みである対話的自己論（Dialogical Self Theory；Hermans & Kempen, 1993/2006）について論じた。そして，対話的自己論における自己の考え方やＩポジションおよびSelfの概念について説明した。本研究が対話的自己論に依拠する理由として次の２つを示した。第一に，対話的自己論では各Ｉポジションが影響を受けている外的環境との相互作用（行為や経験）や他者（人・モノ）も自己内の外部ポジションに置いて検討することを可能にする。そのため，外的環境との相互作用（行為や経験）や他者（人・モノ）との関係から自己形成が検討できる可能性がある。第二に，対話的自己論によって，自己形成を自己の様々な側面を包括して検討できる可能性があると考えられた。自己には様々な側面が存在するが，その側面間の調整が自己形成だと考えられている。対話的自己論では自己の様々な側面をＩポジションとして置き換え，各Ｉポジション同士の対話的関係や Self の概念を用いることで，自己の様々な側面の調整を描くことが可能だと考えた。

第 3 章．対象と方法

本研究のおける対象と方法について論じた。まず，本研究における適当な対象者数について検討した。本研究は対象者を１人にすることで，関係のある他者や社会を含めた研究となり，個と社会の関係性にアプローチできると考えた。またドミナントとは異なる立場の保育者にあてはまる条件を検討して，筆者を対象にした。さらに，筆者のプロフィールについても年代に分けて詳述した。次に，本研究で採用した質的研究方法論であるオートエスノグラフィー（Ellis & Bochner, 2000/2006）の概要や強み，課題について説明した。オートエスノグラフィーを採用した理由は次の３つである。第一に，筆者を対象にすることで，その周りの他者や社会についてのデータ採取をすることが可能なため，自己形成を捉える視点である「外的環境との相互作用（行為や経験)」や「他者（人・モノ)」を検討するのに適していたからである。第二に，自己形成は既存の価値観と新たに生じる価値観を統合することであるため，オートエスノグラフィーにより経験の意味づけを探索していく作業が，筆者自身の自己形成を検討することになるからである。第三に,「保育者になる」ことをドミナントとは異なる立場の保育者の視点で研究できるからである。データ収集では次のような工夫を行った。オートエスノグラフィーは論理科学モードのように事実を追及するのではなく，物語モードのように出来事の筋立て方や意味づけを追及するため，データの事実関係を厳密に問わない。しかし，記憶を唯一のデータにすると，恣意的な解釈に陥る可能性が懸念される。その点を克服するために，データ収集において回顧的記録，研究協力者による筆者へのインタビュー，新人保育者時代の日記を採用した。データ分析では次の工夫をした。対話的自己論による自己に対する空間的な理解では，自己形成の「時間」に関する側面である「生きた時間」のプロセスを描けない。この点を補うために，本研究では複線径路等至性モデリング（以下，TEM：安田・サトウ，2012）による分析も行うことにした。これにより，筆者が「外的環境との相互作用（行為や経験)」や「他者（人・モノ)」との関係を「時間」のなかで意味づけて，どのように自己形成したのかを明らかにすることが期待された。

第 4 章．保育職を目指し就職するまでの経験：保育業界で園長として働くことを見据えた自己形成

保育職を目指し就職するまでの経験における保育者（筆者）の自己形成を明らかにした。TEM による分析の結果，私立幼稚園を継ぐ筆者にとって保育職に就く過程における自己形成は，保育業界で園長として働く保障された未来を見据えたものであり，未来への志向性が現在に与える影響（石川，2010）が考えられた。ドミナントとは異なる立場の保育者ならではの自己形成として，筆者は保育職に就職するも，理想とする保育者像や保育者としての使命感も持っていなかった点が示された。これは幼稚園教諭や小学校以上の教諭は免許状取得のために教育実習が不可欠であるが，保育士試験では実技試験があるものの保育実習は免除されていることが原因だと考えられた。また，各期の自己形成を対話的自己論の視点から分析した結果より，自分のキャリアという価値観だけでなく，「家族が優先」という異なる価値観が合わさることで家業の幼稚園を継ぐに至っていた。すなわち，保育職に就くまでの過程における進路の決断は重点となる価値観が異なる価値観を調整し，その結果として進路が決定されると考えられた。

第 5 章．保育職という新たな環境への移行経験：大学院の経験に対する意識が希薄化していく自己形成

保育職という新たな環境への移行経験における新人保育者（筆者）の自己形成を検討した。結果，その自己形成は大学院の経験に対する意識が希薄化していくプロセスであることが明らかになった。また，Bridges（2004/2014）の移行理論から検討したところ，大学院の経験に対する意識が希薄化していくプロセスは次のように考えられた。「終わり」：筆者は保育者になり，大学院時代の方法では保育実践に対処できない事態が続いた時に，過去の習慣からくる大学院の経験や考え方でカバーしようとするも上手くいかなかった。「ニュートラルゾーン」：その後，現場のなかでの研究の位置づけがわからなくなり，混乱して苦悩するも，次第に実践と研究の融合を諦めて別物だと捉えるようになった。「新たな始まり」：年度末になり，次年度に一人で担任になるという責任の重さが筆者の新しい課題になり，大学院の経験や考え方を保育実践にどのように活かすかという思考には至らなかった。他にも，対話的自己論で分析した結果より，現在置かれている背景と過去の経験から生じる背景が合わさることで，新たな価値観が生じることもわかった。例えば，保育の課題をどのように克服するかを考える筆者の自己内を見ると，「大学院の経験や考え方でカバーしようとする私」（保育者養成教育は受けずに大学院でトレーニングを受けてきた過去の背景）が「保育がうまく進められない私」（保育技術のなさを痛感する新人保育者の現在の背景）に働きかけたものの対処しきれず，「頼りにしていた形式知だけでは対処できない」という価値観が構築されていた。

第 6 章．子どもに対する理解とかかわりから保育者の専門性を発達させる経験：子どもと先輩保育者との関係からなされる自己形成

子どもに対する理解とかかわりから保育者の専門性を発達させる経験における，保育士試験で資格取得した研究者養成大学院出身の新人保育者（筆者）の自己形成を検討した。その結果，新人保育者の自己形成は，子どもと先輩保育者の三者関係のなかでなされていることがわかった。また TEM の結果

より，新人保育者は保育で「できないこと」を受け入れたことで，「自分の実力が足りない部分」と「実力の問題ではなく保育では自分が思ったようにはすすまないこともある」という部分の線引きができていったことから，新人保育者が成長するうえで「できないこと」を受けいれる経験も重要であることが示唆された。他にも，対話的自己論の分析結果より，ドミナントとは異なる立場の保育者ならではの子ども理解の難しさが確認された。それは大学院における参与観察のトレーニングにより形成された「子どもの行動を分析的に見る私」と子どもとのかかわりから形成された「子どもの気持ちを感じとる私」という 2 つのＩポジションの対立から生じていた

終章．総合考察

本章では各章の結果を踏まえて，ドミナントとは異なる立場の保育者の自己形成を明らかにしたことで得られた 4 点の成果を示した。

第一に，ドミナントとは異なる立場の保育者の自己形成の独自性が示された。本研究で扱ったドミナントとは異なる立場の保育者（筆者）の保育職への就職は，保育者に対する憧れではなく，家業の幼稚園の事業継承や弟との関係から決定されていた（第 4 章）。また，保育実習の経験が無いことから，理想の保育者像も持っていなかった（第 4 章）。さらに，研究者養成大学院の経験によって，研究と実践の間に感じる葛藤（第 5 章）や子ども理解の難しさ（第 6 章）が生じていた。先行研究との対比では，保育業種ではない他業種の事業継承者は家業と異なる業種で修行する（落合，2016）のに対して，ドミナントとは異なる立場の保育者である筆者は家業と同業の職種である保育園で修行をしていた（第 5 章，第 6 章）。このような点は他業種の事業継承者と異なる点である。しかし，ファミリー・ビジネス事業継承者の外部の実績があれば，家業の事業において有能な経営者として承認されやすい（落合，2016）という論理は，家業が幼稚園の保育者（筆者）にも働いていたと考えられる。

第二に，保育者の変化・成長に対する新たな捉え方を提示した点である。序章では先行研究が保育者の変化・成長を右肩上がりで一様なものとして捉えていることを批判した。そのうえで，本研究は保育者の変化・成長を自己形成という概念で捉え，対話的自己論の理論的枠組みから検討した。先行研究によれば，保育者は熟達化に伴い，知識量や子どもへのかかわり方の選択肢が増加したり複数の推論が可能になる（高濱，2000）。この知見に基づけば，Ｉポジションの増加は保育者が物事を捉えるさいの基準や視点の増加を意味すると考えられる。そのことは一見すると保育者の変化・成長の右肩上がり的な側面を示しており，保育者は変化・成長するほど，より良い状態になると捉えられる。しかし，本研究が各章における保育者（筆者）の自己内対話の様相を検討したところ，保育者の変化・成長において物事を捉えるさいの基準や視点であるＩポジションが増加することで，それらが相互に影響しあい，保育者に新たな葛藤や混乱を生じさせるネガティブな側面があることが示唆された。したがって，今後は保育者の変化・成長におけるポジティブな側面だけでなく，ネガティブな側面にも着目する必要がある。

第三に，過去の経験の意味づけとその変容が保育者の変化・成長に影響を与える点を示せたことである。先行研究（e.g.，梶田・杉村・後藤・吉田・桐山，1990；上村，2016）は保育者の変化・成長に影響する過去の経験に着目していたものの，それを普遍的な要因として扱い，また過去の経験に対

する意味づけも一定であるように捉えていた。しかし，本研究により，保育者の変化・成長には過去の経験が影響するものの，過去の経験に対する意味づけは一定ではなく，外的環境との相互作用（行為や経験）や他者（人・モノ）の影響により変容することが明らかになった。したがって，今後の研究では保育者の変化・成長に影響する過去の経験を副次的に扱うのではなく，その意味づけの変容も合わせて検討することが重要になる。

第四に，保育者の変化・成長に関する「ローカルな知」を提示した点である。保育者の変化・成長に関する先行研究では，経験年数によりステージ区分して検討しているため，ドミナントとは異なる立場の保育者の背景が捨象されており，独自の困難さは表れていない。近年，ドミナントとは異なる立場の保育者に着目した研究も蓄積されつつあるが，分類や多様性を明らかにするため，保育者の変化・成長を外的環境との相互作用（行為や経験）や他者（人・モノ）との関係から個別具体的に描いていないものもある。本研究はオートエスノグラフィーという研究方法論によって，筆者を対象に外的環境との相互作用（行為や経験）や他者（人・モノ）との関係から検討したことで，これまでのドミナントとは異なる立場の保育者に関する研究で捨象されていた，個別具体的な側面についての理解を可能とする「ローカルな知」が提示できた。

本研究の限界と課題は次の3点である。第一に，本研究の知見は保育職に就職するまでの期間と新人保育者時代の自己形成に限定される。今後の課題は，長期間のスパンから保育者の自己形成を検討するさいに，上記の知見がどのように影響するのかを検討する必要がある。第二に，保育者の自己形成を時代背景との関連から検討できていない点である。第三に，本研究は自己形成の概念に着目して保育者の変化・成長の捉え方を検討したが，これは保育者の変化・成長を言語化された意識の側面から検討したに過ぎない。今後は身体知や暗黙知の側面も包括しながら検討を行い，保育者の変化・成長の捉え方を多面的・多角的に検討していく必要がある。

引用文献

足立里美・柴崎正行（2010）保育者アイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と再構築の構造についての検討―担任保育者に焦点をあてて―．保育学研究，48(2)，107-118.

Baltes,P.B.,Reese,H.W.＆ Lipsitt,L.P. (1980). Life-Span Developmental Psychology. *Annual Review of Psychology*, 31, 65-110.

ブリッジズ,W.(2014)トランジション（倉光修・小林哲郎，訳）．パンローリング．(Bridges,W.(2004). *Transitions(2nd ed)*. Da Capo Press.)

エリス,C.・ボクナー,A.P.(2006) 第5章 自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性：研究対象としての研究者(平山満義，監訳)(大谷尚・伊藤勇，訳)．デンジン,N.K.・リンカン,Y.S.(編)．質的研究ハンドブック 3 巻 質的研究資料の収集と解釈．北大路書房．129-164. (Ellis,C.＆Bochner,A.P.(2000). Autoethnography, Personal Narrative, Reflexivity: Research as Subject. Denzin,N.K.＆Lincoln,Y.S.(Eds.), *Handbook of qualitative research(2nd ed)*. Sage Publications.)

濱名潔（2021）ストレートマスターの保育者はどのようにキャリアを形成するのか―キャリア形成に

おける困難に着目して―. 保育学研究, 59(3), 49-61.
水間玲子・森岡正芳, 訳). 新曜社. (Hermans,H.& Kempen,H.(1993). *The Dialogical Self*. Elsevier.)
石川茜恵（2010）時間軸からみた自己形成のプロセス. 中央大学大学院研究年報, 39, 99-110.
梶田正巳・杉村伸一郎・後藤宗理・吉田直子・桐山雅子（1990）保育観の形成過程に関する事例研究. 名古屋大學教育學部紀要 教育心理学科, 37, 141-162.
木村敏（1982）時間と自己. 中公新書.
香曽我部琢（2013）保育者の転機の語りにおける自己形成プロセス―展望の形成とその共有化に着目して―. 保育学研究, 51(1), 117-130.
香曽我部琢（2015）保育者の自己形成と実践コミュニティの変容-対話的自己モデルによる実践コミュニティの分析-. 宮城教育大学紀要, 50, 171-180.
溝上慎一（2008）自己形成の心理学―他者の森をかけ抜けて自己になる. 世界思想社.
中間玲子（2021）新人・若手社員を肯定する他者となり自己形成を促そう. RMS Message, 63, リクルートマネジメントソリューションズ. https://www.recruit-ms.co.jp/issue/interview/0000001005/?theme=starter/（情報取得 2022/7/12）
中村麻由子・岩川 直樹（2010）自己形成・他者承認・承認文化の再形成. 埼玉大学紀要教育学部, 59, 67-80.
落合康裕（2016）事業承継のジレンマ 後継者の制約と自立のマネジメント. 白桃書房.
田頭伸子・金丸キミエ・堀田稔・奥原球喜・福間早苗・國冨みずほ・三川明美（2011）保育者養成校（短期大学）卒業生のキャリア形成に関する調査. 広島文化学園短期大学紀要, 44, 47-55.
高濱裕子（2000）保育者の熟達化プロセス：経験年数と事例に対する対応. 発達心理学研究, 11(3), 200-211.
竹石聖子（2011）第 7 章 学び, 成長する保育者. 榎田二三子・大沼良子・増田時枝（編著）. 改訂 保育者論. 建帛社. 108-121.
上村晶（2016）初任保育者が子どもとわかり合おうとする関係構築プロセス. 保育学研究, 54(2), 71-82.
山田剛史（2003）青年期の自己形成に関する研究の概観と展望－現象(リアリティ)理解のためのトライアンギュレーション－. 神戸大学人間科学研究, 11(1), 165-177.
安田裕子・サトウタツヤ（編著）. TEM でわかる人生の径路―質的研究の新展開. 誠心書房.